編集後記

「部落解放研究」第七号をお送りする。教育の思想統制に始まった部落解放運動と同和教育運動への攻撃は今なお続きながらも、これら運動の毅然たる反撃の中で、（行政）権力による統制と攻撃の反倫理性と無思想性の滑稽が、その実体をさらしつつあるかにみえる。この時期、折しも当研究所は、設立三〇周年というわが研究・啓発の歴史の節目を迎えるに至った（本号所収の「特別報告」を参照）。部落解放理論の構築と展開、それを要とした現代世界・日本の非人間的状況の批判と克服のための研究実践の緊要さは、あらためて強調するまでもない。ただこのような状況なればこそ、その意味を嚙みしめるものである。

本号は、三つのテーマから成る。第一テーマでは、小森論文で、昨今の「部落史見直し」論（折衷論を含めて）に内在するイデオロギー性（虚偽性）が暴かれ、科学的な歴史認識の基本的パースペクティブが提示された。政平論文で、部落解放運動及び解放理論をめぐる今日的状況を批判し克服するための導きの糸として、「三つの命題」の解釈と適用の豊富化がめざされた。小武論文で、政治権力の宗教政策にみる「国家神道」復活に向けた野望が暴かれ、彼らの策動を理屈づけているイデオロギーの危険が批判された。いずれも、今日の「政治状況と解放理論」が避けて通ることのできない論点を衝く論稿である。第二のテーマでは、安論文で、日本人男性と結婚した韓国人妻の内面の苦悶が分析され、新来外国人のまなざしから日本の「イエ」の抑圧性が暴かれた。水越論文で、同じく、日本人を夫にもつフィリピン人女性の生活史が再構成されるかたちで、「イエ」の抑圧性が暴かれた。いずれの論稿も、外国人差別と女性差別（フェミニズム論）の接点に成立する問題領野としてある。新来外国人が定住しつつある今、日本の社会と文化がより厳しく問われるに至っている。第三のテーマでは、森島論文で、東西統一後のドイツの右翼勢力をめぐる政治状況が分析され、「歴史」と「民族」を背負って葛藤する人々の苦悩が描かれた。青木論文で、今日の日本の野宿者の人口構成と就労実態が俯瞰された。最後に資料解題として、笹尾論文で、広島市の被差別部落の近現代史の聞き取りデータが紹介された。近現代史にみる部落差別と差別との闘いの原点に学ぶこともまた、今日欠くことができない課題である。

この一年、研究所の研究活動の基本に位置づけるべく、

解放理論研究の全体的な体制づくりがめざされた。今年度は部落史研究をめぐる研究集会も予定されている。そのためには、研究活動が日常的に機能しなければならない。その新たな体制も動き出そうとしている。これが、現在の当研究所の問題意識であり、意志である。部落の完全解放と人間解放に向けた研究活動のための十分な表現媒体たるべく、本誌はますます奮闘しなければならない。

（A）